

特殊奏法を活用した金管楽器の基礎的技術習得法についての研究

研究代表者：和歌山大学教育学部 小寺 香奈

共同研究者：和歌山県立向陽高等学校 今西 秀彰

【研究の趣旨】

本研究は、「金管楽器の特殊奏法を習得することが、通常奏法のテクニック向上に繋がる」という仮説に基づき発想されたものである。これは、筆者が長年特殊奏法を伴う作品演奏に携わるなかで日々実感してきたことであるが、この所謂「特殊奏法の効果」とでも呼ぶべきものが、部活動で楽器を愛好する中・高生にもそのまま当てはまるのではないかと。そして、もし一定の効果が得られれば、今日の楽器奏法指導にも重要な示唆を含んでいるのではないかと考えた。

特殊奏法は現代奏法、又は拡張奏法 (extended techniques) とも呼ばれ、特に extended が表すように、通常の楽器演奏に必要なテクニック (以下通常奏法と記す) から「拡張された」奏法、とイメージするとわかり易いかもしれない。

現在、部活動で管楽器を演奏する生徒を主な対象とした教則本は数多くあるが、特殊奏法からのアプローチは筆者の知る限りまだない。そこで、県内でも熱心に吹奏楽に取り組む県立向陽高等学校の生徒の協力を得て、特殊奏法を一定期間練習することで、演奏上どのような変化があるかを調査した。研究の初年度にあたる今年度は、筆者の個人的な経験的観測が、どの程度高校生にも当てはまるかを確認することを目的とし、導入的な調査を試みた。

【研究の概要】

研究協力者…向陽高等学校吹奏楽部のメンバーのうち8名

まずはじめに、中・低音金管楽器であるトロンボーン、ユーフォニアム、チューバを担当する生徒全員を対象に、特殊奏法のレクチャーを行い、実験に参加してくれる生徒を募集したところ、8名の生徒が手をあげてくれた。この8名に約1ヶ月間、重音、ベンディング、四分音の3つの奏法を練習してもらい、その習得のプロセスを追った。1ヶ月のなかで、5回程度学校に出向いて、指導とチェックを繰り返した。3つの奏法を選んだ理由としては、①現代音楽作品のなかでも頻繁に使用される金管楽器の代表的な奏法であり、②比較的短期間で習得が可能である。さらに、③通常奏法のテクニックに応用しやすく、上達を実感し易いと考えたためである。結果として、生徒は短期間の練習である程度奏法を習得し、特に重音奏法とベンディングは楽しんで練習しているように見受けられた。

【各奏法について】

・重音…金管楽器の重音は楽器音と奏者の声を組み合わせる。すなわち、木管楽器のように楽器自体

の振動を変質させるわけではなく、口唇と喉の声帯2つの発音源を同時に鳴らすという原始的な方法によるのが一般的である。一部の音程を除いて、声と音との組み合わせであらゆる音程を作ることができる。

・ベンディング…ヴァルヴを変えずにアンブシュアの操作だけでピッチを強制的に変化させる技術である。音が曲がって (bend) 聴こえるこの奏法は、ポップスやジャズの分野ではよく使用されるが、現代音楽作品のなかでは、より明確にヴェンドするピッチが指定されたり、前述のものとはまた違った使用方法であることが多い。金管楽器のピッチは、管長と倍音の組み合わせで導き出されるが、それだけではまだピッチに幅、すなわち誤差が残されている。通常はアンブシュアや息のコントロールによって一箇所のピッチを狙って演奏するが、この幅を行ったり来たりするのがベンディングである。ベンディングは特に中音域では上行形より下行形の方がピッチを曲げられる幅が広い。

・四分音…一般的に微分音とは半音（短2度）より狭い音程から発生するピッチをいう。その中でも比較的頻繁に用いられ、また効果が得られ易いのが四分音である。四分音は半音をさらに半分にした（つまり全音を4分割した）もので、既に20世紀前半にビシネグラツキーなどの作曲家によって開拓されてきた。ヴァルヴを備えた金管楽器では、運指によって、トロンボーンにおいてはスライドの調整によって四分音を作ることができるが、正確な四分音程に導くためのソルフェージュ能力も要求されるため、重音、ベンディングと比べると難易度は高い。

【研究の経過】

各奏法について一回目のレクチャーをした後、一定期間指示した練習に取り組んでもらった。まずは練習課題を与えるのではなく、各奏法に慣れるため、特定の音のみで重音を作ったり、音を曲げたりすることができるように取り組んでもらった。その後、どの程度出来るようになったかのチェックを含め、2回目のレクチャーの後、練習課題を配布して取り組んでもらった。生徒の様子としては、最初は失敗をおそれて恐る恐る取り組んでいたり、説明や模範演奏（筆者による）を聴いても、自分の口や身体をどのように変化させればそれが出来るのかを掴むのに時間がかかり、苦労していた生徒も見受けられた。しかし練習課題を配布した辺りから、練習が軌道に乗り始め、全員が丁寧に課題に取り組んだ。その後も、短い時間ではあったが、個別にアドバイスをしたり、みんなで集まって練習するなど、8名の習得プロセスをみながら指導を行った。尚、テューバに関しては、四分音課題は取り止めた。楽器の種類が色々あったり、運指が複雑になり過ぎたりするためである。

【アンケート調査】

3つの奏法に約1ヶ月間取り組んだ後、アンケート調査を行った。

「特殊奏法の練習課題の練習が進むにつれて、苦手意識のあるテクニックに何らかの変化があったか」という質問に対しては、特に「音程」に関して記述するものが多かった。以下のような回答である。

[音程]

- ・四分音を練習すると、半音の違いが前よりも大きく違うように聴こえて、練習する前より普段あまり出てこない音の音程がはっきり吹けるようになりました。
- ・ベンディングでは音程の微調整がし易くなった気がした。
- ・音程の上げ下げの幅が広がった。

また、全体的な感想としては、以下のような回答が得られた。

- ・ベンディングで自分が吹いている音での音程の幅が広がったので、その時に必要なピッチが出せるようになりました。ちょっと意識すると音程を上げ下げできることはとてもいいテクニックだと思った。
- ・特殊奏法の練習で自分のアンブシュアやアパチュアの柔軟性のなさを実感しました。特に重音奏法では、倍音をより意識して全員のハーモニーを感じ易くなりました。ベンディング練習をする前は、少しでも管の抜き具合が間違っていると音程がとても合いにくくなっていましたが、練習をしてからは、音程を柔軟に合わせられるようになってきた気がしました。
- ・重音奏法を練習してみて、5音3音をイメージしたり、逆に5音3音を聴いた上で根音をイメージすることを更に意識できた。ベンディングは苦手意識があったけれど、練習してくうちに、ピッチの安定感が出た気がする。

【研究の成果と今後の課題】

「金管楽器の特殊奏法を習得することが、通常奏法のテクニック向上に繋がる」という筆者の考えは、概ね高校生にも当てはまるという結果が出たように思う。実際、特殊奏法の指導を行なっている最中、特に重音やベンディングが成功した時、それまでアンブシュアに力が入っていたり、口の中の力みにより音がかたい生徒の音色が、大きく変化する様子がみて取れた。アンケート調査の結果からも、生徒自身が音程の微調整がし易くなった、リップスラーが改善した、など自分の演奏が良くなっていることを実感しているのが読み取れる。

四分音に関しては、やはり基礎となるソルフェージュ能力の違いにより、スムーズに習得できる生徒とそうでない生徒の差が大きく出た。しかし、途中から、平均律に調律された鍵盤楽器を使用し、ある音に対して四分音高い、又は低い音をぶつけていくやり方では全員がその音程感覚を掴むことができた。いずれの奏法においても、柔軟性だけでなく、音程感覚、つまり自分の「聴く耳」自体が磨かれたという生徒が多く、一つの奏法を習得するプロセスにおいて、複数のテクニックや感覚が向上していく様子が確認できた。また、特殊奏法は楽器構造を理解することにも繋がる。これまで目の前の楽器に対して、ほとんど疑問を抱かずにきた生徒たちが、自分の楽器は不完全なものなのかもしれない、道具としてどういう特性があるのか、もっと色々な音が出るのかな、などと想像力が掻き立てられるような体験になったようである。

今回、高校生においても特殊奏法習得が通常奏法にもたらす一定の効果を確認することができたので、次年度からは、特殊奏法を組み込んだより体系的な奏法指導について模索していきたい。